立命館地理学　第10号（1998）49～58

宗教的ランドマークとその要件

――大観音像を例として――

津　川　康　雄*

Ⅰ．はじめに

人間の保有する感覚・知覚の中で視覚は極めて重要な役割を担っている。人間は時間の経過を経ながら、日々、景観を昼夜の別やライフスタイルの差はあるにせよ認知し、自らの生活空間（認知空間）を生きてきた。そして、人々は景観を構成する様々な‘もの’の色と形を注意機能を働かせることにより、それを認知し、知覚・思考してきた[1]。このような景観において、人々にシンボリックに認識される対象となる‘もの’の一つがランドマークである。

ランドマークは当該地域の個性を示す特徴的な景観構成要素で、人々の空間認識を高め、地域イメージの確定を促す作用を果すものと考えられる[2]。また、地理的空間におけるランドマークは、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、空間的座標点として定位されるものである[3]。

なかでも、人文的ランドマークは地域において、人間の諸活動の結果、自然発生的あるいは人為的に生み出され、人々の空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在ということになろう。また、人々の意識の中に共有感・存在感をもって受け入れられる対象であることも重要な要件と考えられる。それらは、人それぞれの感情や感性に作用し、快適性・潤い・安堵感・郷愁感・畏怖畏敬の念など様々な効果をもたらすこともあろう。そして、個々人のメンタルマップを形成する際の重要な要件にもなる。

ランドマークに関する研究は、これまでいくつかのアプローチがなされており、a．都市のイメージ形成に関わるランドマークの役割を明らかにしたLynch K.（リンチ）の研究[4]、b．地域計画・都市計画など主に建築の分野から行われている都市空間形成におけるランドマークの役割を示した研究[5]、c．メンタルマップにおけるランドマークの位置づけ[6]などといった形で行われている。

とくに、リンチは都市のイメージを形成する要素として、1．パス（Paths）…各種の道筋、2．エッジ（Edges）…各種の線状の要素、3．ディストリクト（District）…都市の部分、4．ノード（Nodes）…都市内部の主要な集合点、5．ランドマーク（Landmarks）…外部から認識できる特徴的・点的要素、などを挙げて説明し、ランドマークが都市地域における重要な認識対象であることを明らかにしている。

本稿では、宗教性がランドマークに反映される例として、日本各地に造立されている大

* 高崎経済大学地域政策学部

観音像を取り上げ、その基盤をなす観音信仰を概観し、ランドマークとして認識される大規模な観音像が造立されていく過程を明らかにしたい。そして、それらがいかにランドマーク化されていったのかについて分析し、宗教性がランドマークに反映される場合の一般性や特殊性といった要因を考察することにより、宗教的ランドマークの諸要件を探ることを目的としている。

Ⅱ．ランドマークの宗教性

日本において、宗教性がランドマークを通じて認識される例は極めて多い。太古より、八百万(やおよろず)の神や仏が信仰・認識されてきた日本では、新旧の別なく、あるいは宗派・教派の別にかかわらず、神社・仏閣及びそれらに関連する建造物などが人々の視覚を支える一要素となっている。また、古くから山岳霊場が各地に展開しており、自然的ランドマークである山が宗教対象として関連づけられることもある。それらが日本的な文化景観を構成する一要素になっていることは疑い得ない。

なかでも、仏教の影響が日本文化の形成に強く寄与しており、古代社会においては仏教文化の伝来が国家の鎮護と結びつき、その後の日本文化の基盤の一つが形成されたのである。もちろん古くから神道の伝統は生きており、農耕社会における自然との共存など、神と人々の生活ないしは祭りを通じて密接に関連してきた。その他の宗教も様々な経緯と歴史の中で育まれ、意識・無意識の差はあるにせよ、我々の生活に直接・間接に影響を及ぼしている。場合によっては建築物などが高い芸術性を保持していることから、文化財として認定されるものも多々あり、地域における重要な観光対象として位置づけられることも多い。

宗教性が見出されるランドマークにはいくつかのパターンが存在する。まず、神社・仏閣の建つ広がりが極めて明確に他の地域と分離されている場合である。そこには、様々な様式に基づく建築物が認められ、仏閣・社殿・鳥居・塔・像・梵鐘などにより特徴づけられる。このような広がりは、人々の日々の生活空間とは異なる一種の別空間として認識されることによって多様な精神作用が促されることも多い。また、システム化されたランドマークとして認識できるものもある。たとえば、仏教の各宗派においては、本末制度に支えられた寺院の地域的・階層的結合関係が認められる。それは日本各地に展開し、寺院と信徒を中心とした結合関係を基本としてランドマーク化されている。さらに、弘法大師の遺徳を偲び功徳を得ようとして数多くの参詣者を集める「四国八十八カ所」の霊場や、各地に展開する「観音霊場」、江戸時代に隆盛を極める「お伊勢参り」や「成田詣」など、信仰と物見遊山を兼ね備えた場所にその例を見出すことができる。このように、現代社会においても長い歴史に育まれ、地理的慣性に支えられた数多くの宗教的ランドマークを確認することができる[7]。

Ⅲ．観音信仰と観音像

数多い宗教の中で、日本人の生活に深く浸透しているものの一つとして仏教に根ざした“観音信仰”をあげることができる。

速水によると[8]、「古く奈良時代の社会で、

観音がもっとも古く信奉されていたことは疑いない。観音は地蔵・不動に先んじてまず登場し、『観音経』などに説く、幅広く具体的な現世利益によって、日本人の信仰を最初に集めた菩薩であったといえる」と説明する。また、鎌田によると[9]、「観音菩薩は、大慈悲によって人々を救うことを誓願とした大乗の菩薩であり、この観音菩薩ほど広く仏教圏の人々に愛され、信仰され続け、多くの尊像を造り続けられた菩薩は他に例をみない」と述べている。すなわち、観音信仰は仏のこころを示す慈悲が観音菩薩に転化し、あらゆる衆生の悲しみ、苦悩そして願いを包み込んでくれることを基本として、観音は仏の姿になったり、あるいは菩薩の姿になったり、三十三身に変化することによりこの世に現れるとされる。こうして観音信仰は人々の現世利益を求める心に合致し、「南無観世音菩薩」と唱えることであらゆる苦難を取り除いてくれるという無限の慈悲を基本とし、信仰対象として観音菩薩像が位置づけられるようになった。

観音信仰の場としては、京都の清水寺を始め、三十三間堂、東京浅草の浅草寺など日本各地に数多く点在している。とくに、清水寺や浅草寺はその門前に典型的な門前町が形成されており、毎年、多数の善男善女の参詣者を集めている。また、鎌倉時代から室町時代にかけて、観音信仰が大衆化したことにより、「西国巡礼」にならった観音霊場巡礼が全国にもできるようになり、「坂東観音霊場」、「秩父観音霊場」などが成立した。こうした寺院や霊場には観音菩薩が祀られているわけだが、そのほとんどが堂内に本尊として安置されていることが一般的である。

また、日本の地名にも‘観音’がつけられるものが多く、香川県の「観音寺市」をはじめ、神奈川県三浦半島の「観音崎」、京都府船井郡の「観音峠」など地域認識の一要素として位置づけられてきたことが理解される。

Ⅳ．ランドマークとしての大観音像

(a) 造立の経緯と目的

観音信仰の基本となる観音像は、あらゆる功徳を施すという点から、これまでに様々な観音像が造られてきた。たとえば、聖観音・千手観音・十一面観音・如意輪観音・馬頭観音・白衣観音等々である[10]。それぞれに意味があり、願いの込められた姿ということになる。そのほとんどが観音堂などに納められ、人々の信仰心を喚起するものとなり、規模的にも小さなものが多い。長い年月を経てきた観音信仰と観音像は、仏閣及び巡礼の霊場として根強くランドマーク化されてきたのである。

ところが、昭和になるとこれまでには見られなかった観音像の造立が行われるようになる。それは鉄筋コンクリート製（一部に金属製のものがある）の大規模観音像であり、高さ数十メートルから百メートルにも達する大観音像が屋外に造られていくのである。建造技術の進歩とも関連するのであろうが、より強烈に、衆目を集めることの可能な大観音像が出現していった（第１表）。これにより、観音像そのものが、宗教的ランドマークとして、きわめて目立つ、特異な存在として、認識されることになった。

まず、1929（昭和４）年に大船観音造立が観音思想の普及を目的に着手されている。しかし、これは５年後に輪郭が完成したものの、

第1表　大観音像の所在地一覧

名　　称	所在地	造立年次（建）	高さ（材質・色）	立地点	造立主体	造立目的
①北海道大観音（立像）	北海道（芦別市）	平成元年	88m（鉄筋コンクリート・白）	平地（レジャーランド内）	個人↓株式会社	・観光・展望・胎内巡り ・総合レジャーランド（北の京芦別）
②釜石大観音（立像）	岩手県（釜石市）	昭和45年	48.5m（鉄筋コンクリート・白）	岬の突端	寺院	・海の守護・慰霊（津波犠牲者） ・世界平和の祈願 ・展望（釜石湾）
③仙臺天道白衣大観音（立像）	宮城県（仙台市）	平成 3年	100m（鉄筋コンクリート・白）	丘陵上	個人↓株式会社	・平和祈願・展望 ・市制100周年記念（高さ100m） ・観光（ニューワールド仙台）
④会津慈母大観音像（立像）	福島県（河東町）	昭和62年	57m（鉄筋コンクリート・白）	丘陵上（庭園内）	個人↓株式会社	・世界平和・観光・展望 ・庭園（会津村）
⑤高崎白衣大観音（立像）	群馬県（高崎市）	昭和11年	41.5m（鉄筋コンクリート・白）	丘陵上（観音山）	個人↓寺院	・戦没者の慰霊供養 ・観光（展望） ・国民思想の善導
⑥救世大観音像（ぐぜ）（立像）（三尊像）	埼玉県（名栗村）	昭和46年	33m（鉄筋コンクリート・白）	山頂〔白雲山〕	個人（寺院・鳥居観音）	・観音信仰 ・胎内巡り ・展望
⑦東京湾観音（立像）	千葉県（富津市）	昭和36年	56m（鉄筋コンクリート・灰白）	山上（頂）（大坪山）	個人↓宗教法人	・全世界の戦死戦災者の慰霊 ・夜間：灯台の役割 ・展望（東京湾）
⑧大船大観音（半身像）	神奈川県（鎌倉市）	昭和36年（昭和4年に計画）	33m（鉄筋コンクリート・白）	丘陵上	有志	・観音思想の普及
⑨慈母観世音菩薩大立像（大観音立像）（立像）	石川県（加賀市）	昭和63年	73m（鉄筋コンクリート・金）	丘陵上（観音山）	個人	・平和の祈願 ・レジャー施設・展望（ユートピア加賀の郷）
⑩世界平和聖観世音菩薩像（立像）	長野県（山ノ内町）湯田中温泉	昭和41年	25m（青銅製ブロンズ仕上げ）	丘陵上	有志	・世界平和の祈願
⑪霊山観音（座像）（りょうぜん）	京都府（京都市）	昭和30年	26.4m（鉄筋コンクリート・白）	丘陵上	個人→超宗派の教会	・第2次大戦戦没者の慰霊
⑫世界平和大観音像（立像）	兵庫県（東浦町）淡路島	昭和57年	100m（鉄筋コンクリート・灰白）	海辺（丘上）	個人	・世界平和 ・観光（博物館等） ・展望（大阪湾）
⑬小豆島大観音（立像）	香川県（土庄町）	平成 7年	約100m（鉄筋コンクリート・白）	山上	寺院及び有志（遍路会員）	・精神救済・人間育成 ・地域振興（島興し）・展望 ・小豆島八十八ケ所（霊場）
⑭救世慈母大観音像（立像）	福岡県（久留米市）	昭和57年	62m（鉄筋コンクリート・白）	平地（境内）	寺院（成田山・明王寺）	・親子の幸せ（水子供養） ・展望

・高さ25 m 以上の大観音像を取り上げた。これに近いものとして「船岡平和観音像（宮城県・柴田町…24 m」、「平和大観音像（山梨県・韮崎市…24 m）」、「大観音立像（奈良県・高取町…20 m）」などがあげられる。

・なお、ここでは岩壁（肌）に削られた大観音像を除いている。その例としては「百尺観音（福島県・相馬市…約39 m）」、「大谷平和観音（栃木県・宇都宮市…約27 m）」、「百尺観音（千葉県・鋸南町…日本寺）」などがあげられる。

・資料…各種パンフレット、ガイドブック及び聞き取り・現地調査による。

第2次世界大戦の影響で一時中断され1960年に完成をみた。足かけ30余年に及ぶもので高さ33mの半身像である。現在でもその姿はJR東海道線の車窓から眺めることができ、鎌倉市を代表するシンボリックなランドマークとして位置づけることができる。

その後、数多くの立像が造立されていくが、その先駆けとして群馬県高崎市に1934（昭和9）年、高崎白衣大観音が着工され2年後に完成した。これは地元の篤志家である井上保三郎により計画・立像されたものである[11]。高崎市西郊の丘陵地に造立された白衣大観音はその慈悲に満ちた姿が高崎を代表するランドマークとして広く知られ、その後の大観音像造立に少なからず影響を及ぼすことになる。

以後、霊山（りょうぜん）観音（京都市）[12]、東京湾観音（千葉県富津市）[13]、世界平和聖観世音菩薩像（長野県山ノ内町）[14]、釜石大観音（岩手県釜石市）[15]、救世大観音像（埼玉県名栗村）[16]、世界平和大観音像（兵庫県東浦町：淡路島）[17]、救世慈母大観音像（福岡県久留米市）[18]、会津慈母大観音像（福島県河東町）[19]、慈母観世音菩薩大立像（石川県加賀市）[20]、北海道大観音（北海道芦別市）[21]、仙臺天道白衣大観音（宮城県仙台市）[22]、小豆島大観音（香川県土庄町）[23] 等が次々に造られていった。

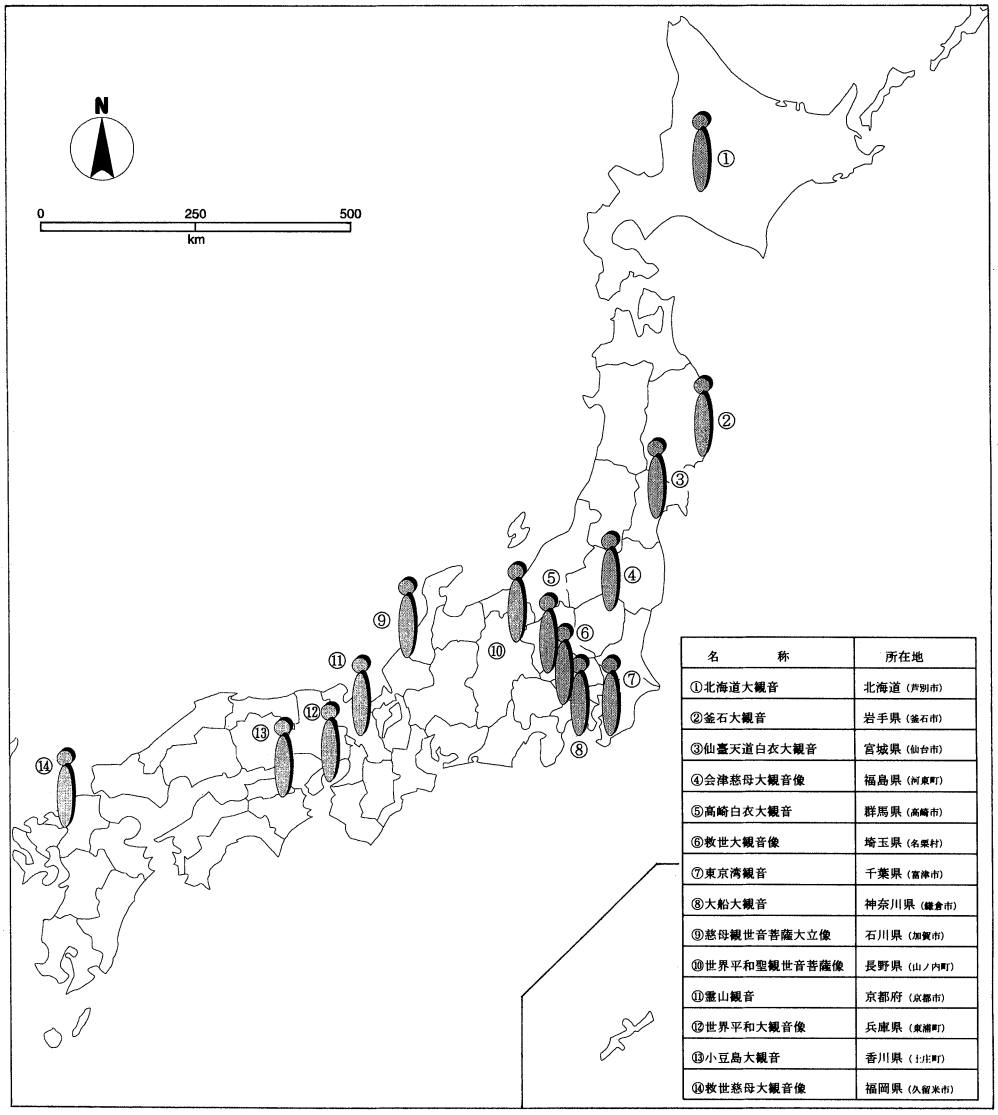
これらコンクリート造りの大観音像とは別に大岩石像（とくに岩壁を掘削して造彫するタイプ）も認められ、大谷（おおや）（栃木県宇都宮市）、百尺観音（福島県相馬市）、百尺観音（千葉県鋸南町：日本寺）などに代表される。いずれも20mを越える高さをもち、東大寺の大仏の総高約18m、鎌倉の大仏総高13mと比較してもその高さが際だっている。

このように、観音信仰の普遍的特性に起因するためか、日本各地に大観音像が造立されており、関東地方への集中傾向は認められるものの、特定の地域に偏って分布することはない。しかし、大観音像造立が伝播するにあたり、それなりの希少性が重視されたためか、大観音像が認められるのは、造立されている道県それぞれに1地点のみである。なお、造立にあたり、人々から大きな反対意見が生じないことも造立の容易さの一つとして挙げられよう。すなわち、本質的に多くの人々に違和感なく受け入れられる対象なのであろう。さらに、法的にも政教分離の原則から建造にあたって、規制対象になりにくいことが根底にあるものと考えられる。

造立の目的は多様であり、①観音信仰の普及、②平和祈願、③戦没者や災害犠牲者の慰霊供養や水子供養、④国民思想の善導、⑤観光・展望、⑥地域振興（地域興し）等々である。歴史的に見ると当初のものはかなり純粋に観音思想の普及や世界平和の祈願といった理念を掲げるものが多いが、近年では観光・レジャーブームに対応するような、観光資源の対象として造立されるものが増加している。その結果、大規模なレジャーランドなどにおけるシンボルとして造立されるものが多い。そこには大観音像を典型的なアイポイントとなるランドマークとして位置づけようとする意図が読みとれる。

(b) 造立の主体と維持管理

大観音像造立に至るきっかけは、個人や有志の意思によるものがほとんどである。それは、個人的な観音信仰に起因することが多く、先祖からの伝承と帰依、個人的な経験・体験などにより発意する例が多い。たとえば、事



名　　称	所在地
①北海道大観音	北海道（芦別市）
②釜石大観音	岩手県（釜石市）
③仙臺天道白衣大観音	宮城県（仙台市）
④会津慈母大観音像	福島県（河東町）
⑤高崎白衣大観音	群馬県（高崎市）
⑥救世大観音像	埼玉県（名栗村）
⑦東京湾観音	千葉県（富津市）
⑧大船大観音	神奈川県（鎌倉市）
⑨慈母観世音菩薩大立像	石川県（加賀市）
⑩世界平和聖観世音菩薩像	長野県（山ノ内町）
⑪霊山観音	京都府（京都市）
⑫世界平和大観音像	兵庫県（東浦町）
⑬小豆島大観音	香川県（土庄町）
⑭救世慈母大観音像	福岡県（久留米市）

第1図　大観音像の分布

業家の場合、事業遂行にあたっての様々な局面に、観音信仰が大きな支えとなったという事由が多く語られ、親族や伴侶に先立たれるといったことに対する慰霊といった理由も多々認められる。このような端緒に加え、造立が具体化していくなかで、様々な目的・意図が付加されていくものと考えられる。

また、大観音像造立にあたっては、高い技術とともに、多額の費用が必要である。個人が中心になる場合、その費用を個人的に捻出できる財力が根底にあることが多い。そこには、個々人の成功の証として大観音像が造立されるという側面を見逃すことはできない。言い換えれば、宗教的純粋さに加え、何らか

の形で成功の証を大観音像に託し、後世への自らの存在感を自己満足的に満たすといった側面もあろう。他方、寺院等が造立する場合には、門徒・信徒などからの浄財を集めるなどしてその費用を賄うことも多い[24]。また、寺院の財政的基盤を浄財によって賄う必然性から、より多くの信者や参拝客を集めるために、大観音像を吸引力を発揮するための一要素として位置づける寺院も認められる。

いったん造立された大観音像を維持管理することは、様々な意味で困難を伴うことが多い。たとえば、造立の経緯はいかなるものであるにせよ、根本的に大観音像は宗教的建造物である。それは、造立後に“開眼法要”が営まれることが慣例となっていることからも窺い知れる。現在の日本では政教分離の原則が貫かれるため、直接的に行政が宗教活動に関与することはできない。したがって、その多くが、個人的所有から寺院等を介在・付置して宗教法人化したり、併設の諸施設とともに観光客などから入場料収入を得てそれらの費用を捻出している例が多い。とは言え、行政も大観音像を公園内の施設の一部として寄付を受け、間接的に維持管理にあたる例も若干認められる。また、大観音像周辺の観光地化を前提とするような道路整備や都市基盤整備を行うこともある。

このように、造立の意図は多様であるにせよ、大観音像という具体的形となって造立されたことには変わりがない。人々は大観音像を眺めることにより、様々なイメージを持つことになるのである。そこには、単なる物体としての存在を越えて、信仰心が喚起されたり、ある種の芸術性が見いだされることもあろう。

(c) 形態的特徴と立地点

大観音像の形態的特徴は、観音信仰に起因する部分が極めて多い。すなわち、あらゆる功徳が観音像によって施されるという観点から、三十三身にまつわるものが多く、清純・清廉・純粋無垢といったイメージを具現化している[25]。したがって、慈母観世音菩薩大立像（石川県加賀市）の金色や、材質が青銅製のため白色とはならない世界平和聖観音菩薩像（長野県山ノ内町）などを除くと圧倒的に表面の色彩は白色系が選ばれている。造形にあたっては、彫刻家や仏師の手によってモデルがつくられることがほとんどである。それが大観音像にある種の芸術性がもたらされる理由の一つとなろう。また、大観音像の視認性を高める要件からか、大船大観音（神奈川県鎌倉市）の半身像、霊山観音（京都府京都市）の座像を除いて、観音全身が表現される立像形式がほとんどである。

立地点についてみると、少なからず大観音像が造立される地点は観音信仰に由来する場所が選ばれることも多い。古くからその地に観音地名がつけられていたり、故事に観音信仰に由来するものがあったりする[26]。また、相対的に造立地点は見晴らしのよい山や丘陵の頂点付近や末端部が選ばれており、人間のアイポイントとしては平地部分から仰ぎ見ることができ、遠くから確認しやすい視認性の高い地点が選ばれている。大観音像の正面の方向は当該地域の中心市街地を見渡すことが多く[27]、宗教的な方向観に基づく例はほとんどない[28]。言い換えれば、造立者の意識や意図が大観音像を通して空間的関係を結ぶことを欲する方向に大観音像の正面が向けられることになる[29]。ただ、四分方位からみると、

西方に視点を向ける例は少なく、東～南を向いているものが多い。その理由の一つは、大観音像と日照の関係であり、視覚的効果を高める必要性から陰影に配慮しているものと考えられる。また、海岸部に造立された釜石大観音、東京湾観音や世界平和大観音像（淡路島）は像の正面が海に向かっており、海からのランドマークとして、ある種、灯台の機能をも果たしているものと言えよう[30]。もちろん、前面の海を俯瞰する地点であり、開放的な眺望が得られる。

像の内部は一部の例外を除いて、胎内に入ることができる構造となっている。初期のものは階段を、近年ではエレベーターが用いられて像の上部に到達できる。胎内には、観音信仰に関係の深い三十三身に由来する観音像が配置され、それらを拝むことで一通りの観音巡礼が可能となったり、他の仏像等を安置し、蠟燭が燈され、香が焚かれることで、宗教的雰囲気が醸し出されたりする。また、ほとんどの大観音像が上部に展望室や展望台が備えられており、参拝者のみならず観光客等の利便性が図られている。

V. おわりに

以上のように、大観音像造立が始まるのは、昭和に入ってからであり、第1期は第2次世界大戦前及び昭和30年代のものである。すなわち、観音思想に基づく造立意図や第2次世界大戦の犠牲者の慰霊という側面を強く保有している。その意味では観音像を祈りの対象として位置づけているものといえよう。しかし、高崎白衣大観音もそうであったように、人々が様々な意図をもって集中・集積する場となることから大観音像に付加価値を加え、胎内からの展望を可能にしたことが、その後大観音像を塔（タワー）として機能させることに結びついた。すなわち、必然的に衆目性・視認性に支えられたランドマークとして位置づけられることになったのである。それは、当該地域において、物理的な位置が示されるアイポイントが成立したことにもなる。

第2期は昭和30年代後半から高度経済成長期の末にかけてであり、引き続き、観音のもつ霊験による御利益や慰霊、そして広く世界平和を願いとして造立されるものが多い。大観音の慈悲を普遍的なものとして位置づけようといった意図が読み取れる。

第3期は高度経済成長が終わり、レジャーブームが進む中、大規模レジャー施設等に造立され、シンボル性が強調された姿として、また展望台としての機能が強く意識されるものとなっている。像の高さも100 mに達するものが次々に造られた。すなわち、見る・見られる存在として位置づけられる。これまで述べてきたように、観音像は宗教的には衆生に広く受け入れられる菩薩であり、その形態も人々に違和感なく認知される対象である。そして、造立の意図は様々であるが、日本各地に大観音像が数多く造立されていったのである。

このように、宗教的色彩の強い大規模なランドマークは信仰対象としての普遍性とともに、あらゆる人々に違和感なく受け入れられる存在であり、人々に安らぎや安堵感をもたらすことが前提となろう。こうした諸条件に合致するのが観音像であったことは疑い得ない。これらは日本各地に造立されている‘大仏’や‘弘法大師像’などにも共通するイメー

ジとしてとらえることができる。宗教的ランドマークは歴史的背景や地理的慣性に支えられてその形が維持されていくことが多い。とくに、神仏が実際の形として表現される像は強くその形が保持されていく。普遍的性格を有する信仰対象がその形を失うことに対する恐怖感といった感情が喚起されるのかもしれない。

昭和になってからという比較的新しい歴史をもつ大観音像であるが、いずれ他の宗教的建造物などと同様に文化財的価値が見出される可能性が高い。こうしてみると大観音像の一部に商業主義的に造立されたものと思われるものが若干見られることは残念である。ランドマークは、少なくとも人々に様々な心理的効果をもたらすものである。場合によっては地域イメージを確定する働きを担っている。今後、このような観点から、宗教的ランドマークのみならず、後世の人々に広く受け入れられ、安らぎや潤いを感じられるようなランドマークが生み出されていくことが期待される。

〔付記〕現地調査に際して、数多くの方々より多大のご配慮をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。なお、この研究をまとめるにあたり、1997年度高崎経済大学特別研究奨励金『空間認識に果たすランドマークの役割とその意義に関する研究（研究代表者 津川康雄）』の一部を使用した。

注

1）岩井　寛『色と形の深層心理』、日本放送出版協会（NHK ブックス492）、1986、11～29頁。

2）内田順文「都市の「風格」について―場所イメージによる都市評価の試み―」、地理学評論59-5、1986、276～290頁。

3）津川康雄「地表空間におけるランドマークとその意義」、立命館地理学第９号、1997、17～29頁。

4）リンチ（丹下健三・富田玲子訳）『都市のイメージ』、岩波書店、1968、55～113頁。

5）日本建築学会編『空間学事典』、井上書院、1996、87～99頁。

6）中村　豊・岡本耕平『メンタルマップ入門』、古今書院、1993、103～142頁。

7）津川康雄「ランドマークの形成と地理的慣性―城郭を中心として―」、高崎経済大学論集39-3、1996、21～42頁。歴史的建造物として保存されてきたものには少なからず地理的慣性を認めることができる。

津川康雄「宗教的ランドマークの成立過程―大観音像を例として―」、地域政策研究1-1、1998、87～101頁。

8）速水　侑『観音・地蔵・不動』、講談社現代新書1326、1996、24頁。

9）鎌田茂雄『観音のきた道』、講談社現代新書1341、1997、132頁。

10）上原昭一・宮　次男『図説日本仏教の世界⑧観音・地蔵・不動』、集英社、1989、58～77頁。

11）横田忠一郎『高崎白衣大観音のしおり―大観音建立秘話―』、あさを社、1984、1～69頁。

井上は高崎の産業発展に貢献した実業家であり、郷土愛ゆえ高崎のシンボルとなるものを造りたいと願った。周知のように高崎は鉄道交通の要衝であり、列車の車窓から衆目を集めることのできるものをと考えたようである（上毛新聞社出版局　坂口二郎編著『実録　たかさき』、1981、197～201頁）。その過程では『五重の塔』や『三重の塔』なども候補にあがったようだが、最終的に『観音像』となった。造立の目的は『戦没者の慰霊供養』、『国民思想の善導』、『観光高崎の建設』などであったとされる。原型は伊勢崎出身の彫刻家森村酉三（日展無鑑査）が造形し、当時の土木建造技術の粋を集めて鉄筋コンクリート９階建、外壁の曲面は変形ブロックが用いられ、表面は白セメントで塗り固められた（石原征明・飯野信義『図説・高崎の歴史』、あかぎ出版、1988、184～185頁）。昭和11年10月20日、井上の誕生日を期して開眼式が挙行された。ちなみに、この観音が造立された地は古くから清水（きよみず）観音があり、観音山という地名の由来ともなったようである（田島武夫『高崎の名所と伝説』、高崎ライオンズクラブ、1973、1～3頁）。したがって、井上の頭には、当地と観音像造立を結びつけようとする意図が少なからずあったものと推測される。この観音像は当初から胎内巡り及び展望が念頭に置かれており、その後の大観音像のプロトタイプとなっていったことは否定できない。第２次世界大戦中には空襲の目標になり取り壊されるのではないかといった噂が流布するように、高崎の代表的ランドマークとして位置づけられることになった。そ

の後、大観音像は昭和13年に高崎市へ寄贈され、昭和16年に和歌山の高野山にあった慈眼院の移転に伴い、同寺へ寄贈され現在に至っている。鉄筋コンクリート造りは木造建造物に比べて寿命が短いとされるため、造立から60年後(1996)に綿密な修復工事が行われた。造立当初は必ずしも良い評価ばかりではなかったと言われるが、現在では多くの人々の心に刻まれたシンボルとなっている。

12) 交通関連の会社を経営していた石川博資により造立され、日本の平和と第2次世界大戦による犠牲者の冥福を祈念することが目的に記されている。ちなみに、原型は彫刻家山崎朝雲の手による。

13) 木材商および林業に従事した宇佐美政美により、世界平和と全世界の戦死戦災者の霊を慰めるために東京湾を望む大坪山に造立された。現在は宗教法人東京湾観音教会により維持・管理されている。

14) 昭和の初期に聖観世音菩薩像が建立されたことが起源となった。しかし、第2次世界大戦による金属供出により、解体された。その後、再建期成同盟の結成により再建された。現在は、宗教法人大悲殿により、維持・管理されている。

15) 釜石市内大只越町の曹洞宗『石応禅寺』が建立したものである。境内地は釜石市より譲渡されたものである。建立の趣意は観音の慈愛により幽明両界の苦悩する人々を救済し、人々の幸せと世界平和を願うとされている（石応禅寺十七世瀬川（雲汀）晴朗『釜石大観音』、1978、石応禅寺、1頁)。特に、当地は津波の被害を数多く受けており、犠牲者の霊を慰める意図が強く働いているものと言えよう。原型は東京湾観音を制作した彫刻家の長谷川鼎で、魚藍観音をデザインしている。魚藍観音は観音三十三変化身の一つで、魚を売り海岸に住む人々に観音教を布教されたと伝えられる（桜井秀男『開かれた法域　釜石大観音』、鎌倉新書（『宗教と現代7-12』)、1986、7～9頁)。

16) 平沼弥太郎（旧埼玉銀行頭取）により、亡き母の遺志を継ぎ、白雲山一帯を観音の霊場として多くの坊舎を造った。その一角に全国から浄財を募って大観音像が造立された。他に類を見ない三体からなる三尊像である。

17) 淡路島出身の奥内豊吉により造立された。美術館・博物館等が併設され、観光要素が強い。現在は豊清山平和観音寺により維持管理されている。

18) 久留米成田山の境内に造立された。当寺は昭和33年に千葉県成田市の新勝寺の分院として建立された。大観音像の原型は彫刻家（仏師）鏡恒夫の作である。

19) 庭園を中心とした「会津村」に芳賀昇之助によって造立された。『満開の花を敷きつめた聖地に万物の母なる観音様を招来する』という願いのもとに築かれた。原型は村田修の作である。

20) レジャーランドと一体化する形で嶋中利男が中心となって造立した。大観音加賀寺によって維持・管理されている。

21) レジャーランド内に造立された。宗教法人として登録されたものではない。施工に際して大手のゼネコンにより手がけられた。

22) レジャーランドの一角に菅原萬を中心とした総合開発会社により造立され、真言宗の寺院のもとで維持・管理が行われている。仙台市市政100周年を記念し、高さを100 m とした。

23) 宗教法人小豆島大観音佛歯寺が主体となり造られた。当寺は小豆島八十八カ所の霊場の一つである。原型となる本尊は京都の松久宗琳仏師により造られた（清水祐孝編『特集　小豆島大観音』、鎌倉新書（『宗教と現代17-4』)、1996、6～11頁。大手ゼネコンにより建造された。このゼネコンは小豆島大観音をはじめ、会津慈母大観音像、救世慈母大観音像等の建造を手がけており、大観音建造の技術を蓄積している。したがって、それぞれの大観音に認められるオリジナリティとは別に、共通性・類似性が随所に現れている。

24) 小豆島大観音（香川県土庄町）は1万人をこえる小豆島遍路会員の浄財をもとに造立された。

25) 船岡平和観音像（宮城県柴田町）は平和の象徴である“鳩”を抱いた姿が表現されており、観音信仰に由来するものばかりとは言えないものも認められる。

26) 高崎の白衣大観音が造られた地点は高崎市西部の観音山であり、古く清水寺（清水観音）が位置していることに起因する。慈母観世音菩薩大立像（石川県加賀市）も当地が観音信仰に由来し観音山と呼ばれていたことを造立地点決定の要因にあげている。

27) 韮崎平和観音像の説明には「市民の平和と無限の発展を祈り、次代を背負う子供達の強く正しい成長、また、皇太子殿下の御成婚を記念しこの地を選び着工」とある。

28) 会津慈母大観音像は磐梯山の麓「四神相応」の地が選ばれ、会津盆地を見渡す地点となっている。ある意味では方位信仰に基づく位置設定がなされた数少ない例である。

29) 船岡平和観音像は旧船岡城の本丸跡に造立される際、観音の方向（視点）を市街地の町役場に定めた。これにより、隣接する大河原町方面からは観音像の背後しか望めない結果となった。

30) 事実、東京湾観音では頭部の冠にライトが点灯するようになっている。